OUHS
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES
スポーツ
大体大
第37号
発行責任者
大阪体育大学広報室
室長　大坪康巳
編集長
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
電話（072）453－7021
FAX（072）453－8818
協力＝教育後援会・学友会

ハンドボール女子

前人未到の領域 8連覇!!

全日本学生ハンドボール選手権大会

高松宮記念杯男子第64回女子第57回全日本学生ハンドボール選手権大会（インカレ）が11月6日～10日、山梨県で開催され、大阪体育大学ハンドボール部女子が史上最多の連続記録を更新する8大会連続（9回目）の優勝（昨年の大会は中止）を達成した。

一進一退の攻防 延長の激闘制す

ハンドボール部女子は大会7連覇中で、10大会連続で決勝に進出している絶対王者だ。初戦を54－6の大勝でスタートし、勝ち上がって試合を重ねるごとにディフェンスや攻撃でのコンビネーションの精度を高めていった。9日の準決勝では、関東の強豪の国士舘大学を寄せ付けず37－26で勝利。コロナ禍に伴う実戦不足の不安をぬぐい去る快勝だった。

10日、決勝で東京女子体育大学と対戦した。試合開始42秒で尾辻素乃子（体育4年）の先制シュートが決まる。試合を良い形でスタートした大体大は一時8－3とリードを広げたが、東京女子体育大学のアグレッシブなディフェンスに決定的なシュートを打てず、追加点がなかなか奪えない展開に。その間に5連続ゴールを決められるなどして逆転を許し、前半を11－15とリードされて折り返した。

後半はお互いにスピードの乗った攻撃の応酬となるが、大体大は鍛えられたチーム一丸のディフェンスで相手の攻撃を防ぎ、着実に得点を積み重ねた。後半10分に18－18と追いつくも一進一退の攻防が続いた。

前後半60分で勝負はつかず、延長戦に突入。延長戦では厳しい練習で磨き上げたスタミナでプレーの質が落ちなかった。最後は岡田彩愛（体育3年）が優勝を決定づけるシュートを決め、激戦を制して32－30で東京女子体育大学を降した。連覇記録を8に更新。前人未踏の領域を突き進んだ。

冷静な試合運びをみせた岡田彩愛

チームをけん引した尾辻素乃子

決勝の後、楠本繁生監督は「8連覇はただの数字。記録より記憶に残る試合を積み上げていきたい。今年のチームは個ではなく総力戦で戦うチームで、試合ごとに選手一人ひとりの調子の良し悪しを見極めて起用した」と話した。

主将でGKの山本春花（体育4年）は「前半は良いスタートを切れたが追い上げられてしまった。後半も接戦が続いたが、日々厳しい練習を続けているので延長に持ち込みさえすれば、絶対に勝てると確信していた」ときっぱり。「大会が始まる前は自分たちの実力も把握できていない状態だったが、この大会で自信がついた」と手ごたえをつかんだようだった。

表彰では尾辻素乃子（体育4年）、岡田彩愛（体育3年）、竹内琉奈（体育2年）が優秀選手賞、山本春花（体育4年）が特別賞、楠本繁生監督が優勝監督賞に輝いた。

延長戦を制して抱き合って喜ぶ選手たち

楠本氏が女子ハンドボール日本代表監督就任

現職教員初の快挙 目指すはパリ五輪

写真提供：JHA/Yukihito TAGUCHI

ハンドボール部女子監督の楠本繁生・体育学部教授が昨秋、女子日本代表（おりひめJAPAN）の監督に就任した。本学の現職の教職員が日本代表監督を務めるのは、全競技を通じて初めてだ。昨年12月の第25回女子世界選手権は4勝2敗。2024年パリ五輪出場に向けた戦いが始まった。

楠本監督は高校・大学で日本一を積み重ねた名伯楽だ。本学で選手として全日本学生選手権（インカレ）で優勝し、京都府立洛北高校に保健体育科教諭として赴任。在任23年間で全国高校総体（インターハイ）で4連覇を含む7回優勝。2010年から本学の教員となり、昨年11月、インカレで史上初の8連覇（中止となった前回大会を含む）を達成した。また、U―24日本代表監督として2018年の第24回世界学生選手権（クロアチア）で女子学生日本代表を優勝に導いた。

日本のハンドボールは、昨年の東京五輪で女子は開催国枠を得て11大会ぶりに出場した。2024年パリ五輪で自力出場を勝ち取るため、日本協会は「高校・大学で他に例を見ない強いチーム作りをされてきた」（湧永寛仁会長）という楠本監督に白羽の矢を立てた。

楠本監督が早速打ち出したのは、チームの大幅な若返りだ。11月に発表した代表20名のうち、東京五輪のメンバーは3名だけ。本学卒1年目の相澤菜月（北國銀行）、中山佳穂（同）ら若手が多数選ばれた。また、本学の卒業生は13名を占めた。

世界選手権は12月、スペインで開催された。予選ラウンドの初戦はパラグアイに40―17で快勝、続く格上のブラジルに25―29で敗れ、メインラウンド進出をかけて欧州の強豪クロアチアと対戦。後半に一時3点差を付けられたが、中山の9得点を挙げる活躍などで28―26で勝利。メインラウンドでは初戦のスペインに26―28で敗れたが、オーストリアに32―30、アルゼンチンに31―27で勝利。最終11位で日程を終えた。

楠本監督は「世界の壁は厚かったが、若い選手を多数メンバーに入れ、パリに向けた育成につながった」と振り返る。「監督として求められているのは、パリ五輪でアジアに1つしかない出場枠を獲得する、この一点だけだ。世界トップレベルの韓国、日本より体格に優る中国やカザフスタンに勝たないといけない」と誓っていた。

ハンドボール女子

日本ハンドボール選手権大会（女子）

重圧と疲労の中健闘 大学唯一のベスト4

第73回日本ハンドボール選手権大会（女子の部）が1月、熊本県で行われ、2年連続準優勝中のハンドボール部女子は初優勝を目指したが、準決勝で敗れ、3年連続の決勝進出を逃した。

3年連続の決勝進出ならず

ハンドボール部女子は相手だけではなく、偉大な先輩が積み上げた歴史とも戦っている。11月に山梨県で行われた全日本インカレで史上初の8連覇を達成。息つく暇もなく、年が明けるとすぐに実業団の強豪も参加する日本最高峰の日本選手権に挑んだ。

日本選手権での大学勢の優勝は、男女を通じて1986年の東京女子体育大学以降はない。学生チームとして一昨年、昨年と2年連続で決勝に進出した本学に対し、会場では歴史的快挙を期待する雰囲気が感じられた。

1回戦では筑波大学を30―27で降し、2回戦は日本リーグ（JHL）の強豪、ソニーセミコンダクタマニュファクチャリングと対戦。終始リードされるも後半終了間際に追いつき、延長戦へ。30―29で接戦をものにした。準々決勝では、JHLのプレステージ・インターナショナルアランマーレと対戦。前半からリードし続け、31―25で学生チーム唯一のベスト4入りを果たした。

最高峰で来季につながる経験

準決勝は昨年、延長戦の末に勝利したイズミメイプルレッズと対戦。勝てば3年連続の決勝進出となるが、連戦の疲労が重なり、20―29で敗れた。

12月の世界選手権から女子日本代表の監督としても指揮を執る楠本繁生監督は「負けに対する悔しさもあるが、昨日も夜に試合があり、選手は疲れがたまっている中、良く頑張った。世界選手権のため、日本選手権前の1カ月半チームから離れていたが、選手が自分たち自身で考えながら準備をしていた。この経験は来季のチームにもつながると思う」と話した。

主将の山本春花選手（体育4年）は「相手の固い守備を崩すことができなかった。前半から差がついて厳しい展開だったが、最後まで楠本監督のハンドボールを貫けたことは誇りに思うし、後輩たちも引き継いでほしい。コロナ禍で大会も少ないシーズンだったが、レベルの高い実業団に挑戦できる機会をもらえて感謝している」と4年間の集大成となる大会を終えて、悔しさとともに充実感が感じられる表情で話した。

西川千華　岡田彩愛　㊧笠泉里、㊨山本春花

石川空

高木奈央

松浦未南　尾辻素乃子　中園愛子

タイムアウトでの円陣

【各種競技記録】（順不同）

テニス

◆全日本学生選手権大会（本戦）

【男子】▽シングルス　2回戦進出＝北昇馬▽1回戦敗退＝前田将吾▽ダブルス　16強進出＝前田・村口皓亮

アメリカンフットボール

◆関西学生リーグ

▽3部　7―19和歌山大学、41―0滋賀大学、6―0追手門学院大学

バドミントン

◆全日本学生選手権大会

【男子】▽シングルス　1回戦敗退　名田慎一郎

【女子】▽ダブルス1回戦敗退　新美杏果・宮下真帆

アルティメット

◆全日本大学選手権大会

【オープン】（関西・中四国2位）11―7名古屋大学、8―10静岡大学、10―6中京大学、9―10東京都立大学＝6位

【ウィメン】（関西・中四国3位）4―11中京大学、11―4東北学院大学、7―4西九州大学、7―8獨協大学＝10位

準優勝

前回から躍進も 目指すは優勝

ハンドボール部 男子

全日本学生ハンドボール選手権大会

高松宮記念杯第64回全日本学生ハンドボール選手権大会（インカレ）が11月に開催され、ハンドボール部男子は準優勝。2大会ぶり11回目の優勝は逃したが、前回（2年前）の8位から大きく順位を上げた。

藤田響

関西学生秋季リーグは新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催されず、チームの完成度に不安があるなかで挑んだインカレだった。

初戦で日本大学、2回戦で琉球大学を危なげなく破ったが、以後は激闘の連続となった。

準々決勝では中京大学と対戦。序盤からリードを許し、相手に押し込まれる展開が続く。最大7点差をつけられたが、木太隆雅（体育2年）が悪い流れを断ち切る豪快なシュートを次々と決めた。試合時間残り36秒で29―29の振り出しに戻し、残り1秒で主将の藤田響（体育3年）がアグレッシブに仕掛けて相手の反則を誘発し、7メートルスローを獲得。山本和矢（体育4年）がプレッシャーを物ともせずゴールを決め、30―29で逆転勝利を果たした。

準決勝の日本体育大学戦も立ち上がりを攻められ苦境に立たされたが、徐々に点差を詰めていく。終盤は取っては取られるシーソーゲームとなり、延長戦に突入。GK矢村裕斗（体育3年）が気迫のセーブを連発して1点差を守り切り、38―37で勝ち2大会ぶりに決勝へ進出した。

決勝の相手は関東王者で実業団チームに内定した選手を多数抱える中央大学。大型選手が多くフィジカルと高さを生かした攻めに苦しんだが、対応力の高いディフェンスとスピードのある攻撃で対抗した。後半は互角の戦いを繰り広げ、藤田が両チーム最多の11得点を奪ったが及ばず、28―32で敗れた。

下川真良監督は「身長が低いチームだが、努力と戦術でここまで戦えることを証明してくれた。試合の中で選手が成長し、練習でやっていないことを試合でやってみせ、複雑な戦術もこなした。決勝まで連れてきてくれた選手に感謝したい」と話した。主将の藤田は「大会前は状態は良くなかったが、勝ち上がるごとにチームは成長した。決勝では後半のパフォーマンスを前半から出せていれば結果は違ったかもしれず、悔しい」と振り返った。

表彰式では藤田、梶山瑞生（体育3年）、木太隆雅（体育2年）が優秀選手賞に選ばれた。

敗戦後悔しがる選手たち

山本和也

レスリング

西日本学生レスリング秋季リーグ

レスリング部が11月の西日本学生秋季リーグ2部で28年ぶりの優勝を果たし、1984年春季以来37年ぶりとなる1部昇格を決めた。

歓喜の胴上げ

37年ぶり古豪復活

リーグ戦は2日間で6試合を戦う。本学は5戦全勝とし、最終戦で関西大学と対戦した。2年生の上田蒼空（体育）、主将の前園渓（体育4年）が勝ち、2勝2敗。試合は7人制で7試合目は本学の不戦勝が決まっていたので、あと1勝で昇格が決まる。ここで勝負を決めたのは、1年の大石佳生（体育）だ。ひざの半月板を痛めてリーグ戦がデビュー戦だったが、ブランクを感じさせず勝利。続く濱口奏琉（体育）も1年生ながら勝利した。

前園が2部最優秀選手賞の小田原杯を受けるなど1年生と上級生の力がうまくかみ合ったのが勝因だ。

本学は1970年代に1部リーグで3回優勝し、1984年ロサンゼルス五輪代表の石森宏一を輩出した。選手は試合後、長年部長・監督を務め今年度末で退職する淵本隆文部長（副学長）を胴上げし、古豪復活を祝った。

硬式野球部 男子

阪神大学野球秋季リーグ

硬式野球部男子は9～10月に行われた阪神大学野球秋季リーグでは、7勝5敗で春季と同じ3位。開幕から5連勝したが、後半の勝負所で関西国際大学、天理大学にいずれも連敗し、2019年春以来の優勝を逃した。

杉本壮志

連勝スタート 惜しくも3位

櫻井大暉

大槻龍城

春以降、4年生の大半が引退し、秋は3年生以下のチームに。春に課題だった得点力の強化を図って秋季リーグに臨んだ。

9月5日の初戦、神戸国際大学戦は2―1の八回、森下瞭（体育3年）、阿吹俊介（体育3年）の連続適時打で突き放し、杉本壮志（体育3年）が粘り強く完投して5―2で勝利。勢いをつけて神戸国際大学、追手門学院大学にいずれも2連勝。9月25日の甲南大学戦も5―0で快勝して開幕5連勝とした。

しかし、翌26日は甲南大学に0―2で敗れて初黒星。開幕前のシナリオでは6連勝して実力上位の関西国際大学、天理大学戦に臨むはずだったが、痛い敗戦となった。

勝負所の関西国際大学との初戦は、巨人にドラフト1位で指名される相手の翁田大勢投手に14三振を喫し2―8で敗戦。翌日も3―4で競り負け、天理大学にも0―7、3―8で連敗して優勝争いから脱落した。

一方で収穫もあった。杉戸理斗（体育2年）が左サイドからの角度ある速球、変化球を武器に、関西国際大学2戦目で2番手として6回3分の1を無失点と好投。以後2戦目の先発を務めるようになった。

エースの杉本は、春はリーグ終盤に疲労が出たが投げ込みを増やして秋は1シーズン投げ切り、4勝2敗、防御率1・79を残して成長の跡を見せた。

新主将の大槻龍城（体育3年）はリーグ6位の打率3割5分5厘をマークしてベストナインに選ばれた。菅澤陸（体育2年）が秋から一塁手を任され、全試合に出場したのも前向きな要素だ。

中野和彦監督は春のリーグに向けて「杉本に続く投手を育て、足を絡めた攻撃を鍛えたい」と強化のポイントを語っている。

陸上競技

男子400メートル岩崎快挙！本学初、世界に繋がる表彰台

日本学生陸上競技対校選手権大会
関西学生陸上競技対校選手権大会

日本インカレで2位となった岩崎立来＝5月の関西学生チャンピオンシップ

陸上競技部の男女がインカレの大舞台で相次いで表彰台に立った。

9月に埼玉県であった第90回日本学生陸上競技対校選手権大会。女子やり投げで武本紗栄（体育4年）が59メートル90をマークし初優勝した。前回は2位で、2021年は6月の日本学生個人選手権で目標にしていた60メートルを大幅に超える62メートル39で優勝した。東京五輪代表選考会だった6月の日本選手権は3位で代表の座を逃して「悔いが残った」と悔しがったが、「自分の過程として勝たなければいけない大会だった」というインカレで地力を見せつけ快勝。「3年後、パリを目指す」と夢を広げた。

男子400メートルでは、岩崎立来（体育3年）が奮闘。46秒59で2位に入り、インカレの同種目で本学勢として初の表彰台に立った。400メートルは男女合わせると37年ぶりで、男子短距離としても29年ぶりの快挙だった。2021年は5月の静岡国際5位、関西学生チャンピオンシップ優勝、6月の日本選手権7位。2022年はワールドユニバーシティゲームズ、世界陸上の初出場を目指す。

また、男子やり投げで片川志遠（体育4年）が71メートル94で3位に入った。

武本堂々のインカレ初優勝

関西インカレ4連覇の武本紗栄

投てき種目などメダルラッシュ

関西インカレ女子砲丸投げで表彰台を独占した1位岩本真波（中央）、2位山本佳奈（右）、3位東田歩乃佳

翌10月に開催された第98回関西学生陸上競技対校選手権大会では、投てき種目を中心に優勝ラッシュとなった。

女子はやり投げで、武本が58メートル03で貫録の4連覇。ハンマー投げは高橋沙湖（大学院博士前期課程2年）が58メートル96の大会新をマークし優勝した。砲丸投げは、岩本真波（体育2年）が14メートル49、山本佳奈（体育2年）が13メートル91、東田歩乃佳（体育4年）が13メートル78で1～3位を独占。円盤投げは中瀬綺音（体育2年）が43メートル02で2連覇し、渡部舞（体育3年）も40メートル57で3位に入った。

男子はやり投げで秦康太（体育3年）が69メートル20、末次仁志（体育3年）が69メートル17、片川が67メートル22で1～3位を独占。砲丸投げは下浦大輝（体育4年）が15メートル11で2連覇した。

トラックでは、岩崎が400メートルで47秒55をマークし初優勝。同種目での本学勢の優勝は2014年の第91回大会以来7年ぶりとなった。800メートルも津田竜太朗（体育3年）が1分49秒39で3位に入った。

この結果、投てきと跳躍を合わせたフィールド得点は、男子が48点、女子が72・5点でともに1位。総合得点でも男子は71点で5位、女子は75・5点で3位に入った。

日本インカレハンマー投げ４位の高橋沙湖、５位の大濱未結

バレーボール

激闘制し涙の勝利 価値ある経験と成長

全日本バレーボール大学男子選手権大会

バレーボール部男子は11月29日開幕の第74回全日本大学男子選手権大会の2回戦で関東1部リーグ6位の明治大学に激闘の末勝利。3回戦で敗れたが、勝利後は自分たちの力を出し尽くし、歓喜の涙を流す価値ある1勝を挙げた。

架谷也斗

榮温輝

男子　関西1部リーグ6位として臨んだ本学は1回戦、北海道1位で地力のある北翔大学を僅差のスコアながら3―0で降し、明治大学と対戦した。本学、明治、本学、明治の順で交互にセットを取り、2―2で迎えたフルセット。この試合で本学を救ったのは、ピンチサーバーの篠森勇希（体育2年）だ。Bチームのエースで2セット目から起用されると、強烈なジャンプサーブで2連続、3連続のポイントを挙げた。チームは勢いづき、エース対角の架谷也斗（体育4年）、松岡大樹（体育4年）らが強打を決め、3―2で勝利。選手はコートで号泣した。

続く3回戦で中京大に屈したが、浅井正仁監督は「昨年は1回戦で力を出し切れず敗れたが、今年は価値のある試合ができた」と振り返った。

ただ、関西大学秋季リーグは満足のいく試合内容ではなかったという。

春季リーグはコロナ禍のため中止。秋は前年秋の2位以上を目標に臨んだ。リーグでは強豪の天理大を3―0で降すなど2位と健闘したが、その後の順位決定戦は京都産業大学に2―3、同志社大学に3―2、近畿大学に1―3、立命館大学に1―3。上位相手では相手の高さのある攻撃に苦しみ、セッターを175センチの土井運（体育4年）から184センチの浦田俊介（体育2年）に切り替えて臨んだが、リーグ戦は6位となった。

それだけにインカレの明治戦で力を出し切れたことは大きい。浅井監督は「1年のオポジット・山崎（泰雅・体育）が力をつけるなど昨年よりは数段強くなった」。来春に向け、秋に貴重な経験を積んだ2年の篠森、浦田らがどう成長するか注目される。

前川颯佑

関西大学バレーボール秋季リーグ

昇格まで一歩及ばず

得点し喜ぶ選手たち

女子　バレーボール部女子は関西大学秋季リーグ2部で2位。2019年秋以来となる1部復帰はあと一歩で果たせなかった。

19年秋、2部に降格した後、昨秋は5位。今春は中止。例年なら2部1位は自動昇格で2位が入替戦に進むが、今季は2部1位のみが入替戦に進む狭き門。

リーグ戦では、初戦の姫路獨協大学戦で内容よく3―0で快勝して波に乗った。特に、チームの最優先課題として強化してきたブロックが大きな武器に。主将の重親亜依（体育3年）、センターの権藤真実（体育2年）が中心となり、ブロックで得点を重ねていった。

しかし、関西福祉大学戦では相手のスピードに翻弄されブロックが十分機能できず1―3で初黒星。1次リーグは6勝1敗となった。順位決定戦となる2次リーグではチーム総力戦で戦ったが2敗し、2位という成績でリーグ戦を終えた。

1部復帰を逃したが、ブロック決定率ではリーグトップとなり、ブロックの強化という目標は達成した。リーグ戦終了後、長江晃生監督は「ブロックに関してはうちの大きな武器になった。次は粘り強いレシーブ、と段階的にディフェンスを強化する」。若いチームは来春、2つ目の武器を磨いて1部復帰を目指す。

サーブを打つ増田結子

スパイクを決める山本千尋

四連覇とインカレ出場権逃す
期待の新人と来季は巻き返し

サッカー

サッカー部男子は第99回関西学生サッカーリーグの後期を6勝5敗1分けで終えた。前期とあわせた最終順位は11勝9敗4分けで6位。例年、多数の選手をプロに輩出してきた大学サッカー界の強豪だが、4連覇を果たすことはできなかった。

田原佑真

河村匠

関西学生サッカーリーグ

男子　11月20日。後期リーグ最終戦の立命館大学戦が堺市で行われた。勝ち点が僅差の大学がひしめき、上位4チームに与えられる第70回全日本大学サッカー選手権大会（インカレ）への出場権を獲得するためには勝利が絶対条件。負けられない試合に臨んだ。

試合は早い時間に動いた。前半7分、試合開始から一進一退の攻防が繰り広げられたが、中盤でボールを奪われ、右サイドから攻め上がってきた相手のゴール前への速くて低いクロスに反応したDFがクリアしようとしたボールは、そのままゴールへ。不運なオウンゴールで先制点を許した。

失点後は、J3の鹿児島ユナイテッドFCに内定しているGK・泉森涼太（体育4年）が、後方から適切に声をかけてチームは落ち着いてきた。敵陣でのプレー時間も長くなり、野寄和哉（体育3年）を中心に何度もゴール前にボールを運びチャンスをつくりだそうと試みるも、前半は0―1で終了。

後半もゴールを狙い攻め込むが、自陣でボールをキープしているタイミングでDFが激しくプレッシャーを受けてボールを失うと、ノーマークの状況からゴールを決められ2点差をつけられた。

後半24分には野寄のコーナーキックから平山裕也（体育3年）が頭でコースを変えて、熊谷太陽（体育3年）が押し込み待望のゴール。1点を返して反撃ムードが高まったが、相手の守備を崩すことができず、追いつくことができなかった。最終戦を1―2で落として、インカレの出場権を逃した。

試合後、福島充コーチは「リーグ最終戦で、疲れやけがを抱えながら選手たちはよく頑張った。新チームは来シーズンへ向けてしっかりと準備していきたい」と話した。

連覇は止まったが、1部リーグから7名が選出される新人賞を吉岡直輝（体育1年）と木戸柊摩（体育1年）が受賞したのは明るい材料。来季は巻き返しのシーズンとなる。

野寄和哉

泉森涼太

ノーシードで挑んだインカレ
緒戦快勝も2回戦強豪に敗退

サッカー

サッカー部女子は関西学生女子サッカー秋季リーグを4勝2敗1分けの3位で終え、関西第3代表として12～1月の第30回全日本大学女子サッカー選手権大会（インカレ）の出場権を獲得した。

関西学生女子サッカー秋季リーグ
全日本大学女子サッカー選手権大会

樋口佳那子、GKは津田明日翔

女子　リーグ戦は決定力が課題となり、序盤はなかなか波に乗ることができなかった。3試合を終えて1勝1敗1分け。続く関西大学戦でも試合を通じて押し込む展開を見せたが必要な場面で得点できず、1―2で敗れた。残り3試合で全勝しなければインカレの出場権を逃す窮地。MF神門泰奈（体育3年）は「リーグ戦序盤は試合に出ているメンバーの個の力で打開しようという意識が強かった」と反省する。しかし、もう負けられないところまで追い込まれたことで、チームの勝利が最優先という意識をもって立て直すことができたという。5戦目で春季リーグ優勝の武庫川女子大学に2―1で勝利。聖泉大学に2―1、姫路獨協大学にも2―0で勝って3連勝でインカレの出場権を獲得した。

主将の樋口佳那子（体育3年）はリーグ戦を振り返って「皇后杯と並行してリーグ戦がスタートしたので心身のコンディション調整が難しかった状況が表すように、リーグ全体のレベルが上がってきている。数年前までのように『簡単に勝てる』『上位に進んで当然』といったリーグではなくなってきた」と語る。

インカレは、石居監督が「ここ数年では経験したことのない」というノーシードでの出場となった。

1回戦は札幌大学と対戦。オウンゴールと梅菜々笑（体育2年）、樋口佳那子のゴールで3―0の快勝を飾った。2回戦は関東3位の強豪、早稲田大学が相手。前半は0―0で折り返したが、後半に2失点を喫して敗れた。悲願だった2006年以来のインカレ優勝は次年度に持ち越された。

加井菜月

神門泰奈

柔道

主将・新人持ち味活かす
全国大会での収穫と課題

男子　柔道部男子は、8月の関西学生体重別選手権大会で主将の本松要（体育4年）、新人の廣田智大（体育1年）がともに66キロ級で準々決勝に進んだ。

気持ちが強く攻撃力のある本松。防御力の高い廣田。それぞれ持ち味を発揮して2、3、4回戦に勝って8強に進出。2人は11月の全日本学生体重別選手権（インカレ）の出場を果たす。ともに初戦で敗れたが、本松は優勝した國學院大学の強豪選手を脅かす内容のある試合となった。

また、関西学生での2人の8強進出、久々宮滉大（体育2年）の100キロ級16強により、全日本団体への出場が決定。全日本では、2回戦で帝京科学大学に1―5で敗れたが、初戦は北海学園大学に6―0で快勝した。

生田秀和監督は「全国の場で6―0といい形で勝てたのは自信にはなる。チームはまだまだ小柄なので、冬場はウエイトトレーニングや栄養管理に取り組み、それぞれが1階級上げるつもりで基礎体力をつけてほしい」と来季に向けた課題を話している。

主将の本松要

1年生ながら準々決勝に進んだ廣田智大

関西学生柔道体重別選手権大会
全日本学生柔道体重別団体優勝大会

大黒柱伊藤会心の準優勝
期待高まる一年生の台頭

女子　柔道部女子は8月の関西学生女子体重別選手権大会の78キロ超級で伊藤まりあ（体育4年）が準優勝。

高校3年の時、ひざの前十字靭帯を断裂し手術するなど苦労を重ね、「けがの後もけいこを続けてきた自分をほめたい」と涙した。

伊藤は初出場となった10月の全日本学生女子体重別選手権でも、立ち技から寝技へのスムーズな連携を武器に8強。松田基子監督は「彼女の良さは素直さ。けがで苦労したが、学生最後の1年で蓄えていた力を一気に発揮した」と評価した。

チームは関西学生女子体重別選手権で伊藤のほか63キロ級8強の西尾碧（体育2年）がポイントを挙げて、12月の全日本学生体重別団体優勝大会の出場権を獲得した。

1回戦で強豪の仙台大学と対戦。先鋒の63キロ級・森口志保（体育1年）が粘り強く引き分けに持ち込み、伊藤と78キロ級の辻野いづみ（体育1年）が一本勝ちして一時は2―1とリード。最終的に2―3で敗れたが、会場を大いに沸かせた。

松田監督は「1年生がよく力を出した。辻野も勝利し自信につながったと思う」。大黒柱の伊藤は卒業するが、実績のある選手も入学予定であり、来季に向けて期待が高まる。

78キロ超級で準優勝した伊藤まりあ

78キロ級・辻野いづみ

関西学生女子柔道体重別選手権大会
全日本学生柔道体重別団体優勝大会

再び頂点へ　決意あらたに

関西女子学生バスケットボールリーグ 全日本大学バスケットボール選手権大会

バスケットボール部女子は関西女子学生リーグ1部で2位、全日本大学選手権はベスト8。3度目の日本一を目標に掲げているだけに、村上なおみ監督は「準々決勝は勝ちきれなかった」と悔やんだ。

女子　2007年、2012年にインカレ優勝。「関西でしっかり勝ち、関東を倒す」がテーマのチームにとって、リーグ戦前の調整不足は誤算だった。コロナ禍の影響などから合宿に臨めず、例年実施しているWリーグ勢などとの合同練習もないまま、リーグ戦を戦いながら強化していくかたちになった。

初戦の天理大学戦は約1カ月半ぶりの実戦で、勝利したとはいえディフェンス、オフェンスとも今一つかみあわなかった。その後地力を見せてリーグ戦6連勝で迎えた相手は大阪人間科学大学。2020年秋に敗れ、21年は全関西学生選手権の決勝で勝った。村上監督は「自分は感じていないが、選手はライバルとして意識してしまったのかも知れない」と振り返る。チームは出だしから波に乗れず、60—64で敗れて2位に終わった。

インカレは、リーグ戦で得点が伸びなかったことからディフェンスからの速い切り返しを心がけた。初戦の名古屋経済大学戦は留学生2人を軸に粘られ競った展開になったが、エースの大吉まな（体育3年）が3ポイント8本など37点を上げ、78—68で振り切った。

2回戦はまたも大阪人間科学大学との対戦。敗れた前回は大差がついた後で追い上げ、自信を持って試合に臨めたという。厳しいディフェンスからリズムを作る大体大伝統の試合運びができ、79—54と圧倒。村上監督は「気迫でも勝り、やりたいことをやれた試合だった」と振り返る。

しかし、準々決勝は早稲田大学に57—66で敗れた。前半は37—34とリードしたが、第3クオーターでシュートが入らなかったところを切り返され逆転を許した。

村上監督は「今の自分たちのバスケットボールで戦える感覚はある。得点力アップに向けて、オプションの攻めがもっと重要な場面で出せるようにしたい」。2022年、10年ぶりのインカレ優勝に向けた課題を語った。

アンモールブリート・コール

日高ひかる

奥村鈴（中央）

バスケットボール

収穫多い2年ぶりインカレ

関西学生バスケットボールリーグ 全日本大学バスケットボール選手権大会

バスケットボール部男子は10～11月の関西学生リーグ1部で昨年の10位から4位に浮上。2年ぶりに全日本大学選手権（インカレ）に進出した。

男子　2021年は6月の関西学生選手権の初戦で、4年生が教育実習のため欠場した影響もあり、初戦で立命館大学に66—72で敗れた。雪辱を誓い、高さがない分、コートをフルに使い攻守両面でスピードを重視する自分たちの長所に磨きをかけ、リーグ戦を迎えた。

初戦は立命館大学。3年生以下にとってはリベンジの思いが強かったという。激しいディフェンスから素早い攻撃を展開し、内容ある試合で86—57と快勝。翌日の関西学院大学戦は一時、20点近く離されたが、後半に逆転勝利した。

第3戦は昨年3位の大阪学院大学。よく粘り1点差で快勝。続く天理大学戦では敗れたが、大阪商業大学に勝ってインカレ出場を決めた。最終順位は終盤、留学生選手が強力な3大学に連敗し、4勝4敗で4位となった。

インカレ出場の原動力になったのは、優秀選手に選ばれたポイントガードの請田祐哉（体育3年）。元々強気な姿勢で得点力は高かったが、夏合宿後、チームを引っ張る責任感がぐっと増したといい、大黒柱だった藤本巧太（アルティーリ千葉）の抜けた穴をしっかり埋めた。

インカレは、初戦の相手が優勝候補の一角の白鷗大学に決定。有力な留学生がいるため、ペイントエリアに侵入させないなどディフェンスとリバウンド対策を磨き、試合に臨んだ。

結果は61—90。体のサイズ、フィジカル、経験値とも、この大会で優勝した相手が上だったが、第二クオーターの途中まで約15分間はリードした。フルコートを使ったトラップディフェンスや、ファーストブレーク、2次攻撃でボールを動かすプレーは通用した。比嘉靖監督は「収穫はあった。あとは40分間続けるためのフィジカルコンタクトと経験値」と話す。

選手は大学に戻ると、自分たちに足りない部分のトレーニング、サイズアップに取り組む。

来季に向けて、比嘉監督は「リーグ戦は過去最高が3位。来季はリーグで優勝してインカレに行くことにこだわりたい」と話した。

請田祐哉

アデバンジョ・ウィリアム

中原啓太

剣道

剣道関西男女二冠V

関西学生剣道優勝大会 関西女子学生剣道優勝大会

剣道部男女が快挙を達成した。9月に門真市で行われた第69回関西学生優勝大会・第45回関西女子学生優勝大会で男女同時優勝を果たした。

男子　剣道部男子は、コロナ禍で中止になった昨年をはさみ、一昨年から大会2連覇を果たした。

村上雷多監督は「7人制の試合で前衛で闘う選手がいいなった。

初戦の2回戦は地力のある大阪経済大学に4—1、3回戦は桃山学院大学に7—0で勝ったが、準々決勝の神戸学院大学戦は2—1の辛勝。村上監督は「普段の力を出せば勝てる相手と思われたが、一本取り切る攻撃力が足りない。歯がゆさの残る試合だった」と振り返る。準決勝の関西大学戦に向けて不安を感じたという。

嫌な雰囲気を一掃したのが前衛の3人だ。瀧本、福家、伊﨑が3人連続して勝利。これで勢いを得て5—1で決勝に進んだ。

決勝の相手は近畿大学。過去の対戦では、相手に主導権を取られて萎縮したこともあったというが、この日は本学から仕掛けて主導権を握った。先鋒の瀧本は引き分けだったが、福家、伊﨑が勝利。すると中堅に抜てきされた1年生の伊東凜太郎（体育）が勝ち、三将の熊亮祐（体育3年）が引き分けた後、副将・和田優人（体育4年）、大将・宮本翔太（体育3年）が勝利。5—0と大差をつけて頂点に立った。

本学は6月の関西学生選手権（個人戦）では熊の8強が最高と振るわなかった。特に主将の伊﨑は教育実習と重なったこともあり1回戦負け。「これではいけない」と厳しい稽古を重ねて成長した。村上監督は「伊﨑の姿勢にチーム全体が引っ張られ、9月の優勝大会前には『これで勝負していける』という手ごたえをつかんだ」と振り返る。

ただ、10月の全日本学生優勝大会は初戦で東北大学を5—0で降した後、東京農業大学に2—2の本数差で敗れ、村上監督は「関西大会の準決勝、決勝のような試合ができていたら勝てただろうが、力を出し切ることができなかった」と反省する。

来年度は3連覇に加え、全日本での上位進出を目指す。

働きをし、チームに勢いをつけた」と振り返る。先鋒の瀧本翔太（体育3年）、次鋒の福家瑞寿輝（体育3年）、五将の主将・伊﨑理倫（体育4年）の活躍が光った大会となった。

女子　個人戦の関西女子学生選手権、団体戦の関西女子学生優勝大会。剣道部女子は主将の本田和（体育4年）を軸に2冠を達成した。

コロナ禍のため、剣道は昨年すべての公式戦が中止に。チームに実戦不足の不安はあったが、一方で稽古環境の面では、本学は感染症対策を徹底したうえで比較的、練習を積めた。那須恵美監督は「稽古ができている大学が勝たねばならないという意識はあった」と振り返る。

とはいえ、関西女子学生優勝大会では大学での試合経験の少ない選手が多く、初戦の2回戦の大阪大学戦は緊張が目立ったという。3回戦は、監督が本学出身で手の内をよく知られている関西福祉大学を降した。

準々決勝の大阪教育大学戦では、中堅の堀由美恵（体育2年）の技が光った。コロナに伴うルール改正で、鍔迫り合いになったら自発的に距離を取らねばならないが、互いに分かれる前の技は認められる。堀は鍔迫り合いになって相手が気を抜いた一瞬に引き面。結果的に1—0での勝利となり、ルール改正への対応力が勝利につながった。

大会のハイライトは準決勝の同志社大学戦だ。1—2と劣勢で迎えた大将戦で主将の本田は先に一本を許した。2本取らねば負ける状況から2本取り切って代表戦に持ち込み勝利した。

本田は6月の関西女子学生選手権でも優勝した。1年生の時から常にチームリーダーになることを意識してきた大黒柱で、那須監督は「本田が大将としていることがチームにとって何よりの安心材料になっている」と評価する。

決勝の園田学園女子大学戦は次鋒の福井眞穂（体育3年）が一本取り、1—0で2016年以来5年ぶりの優勝を果たした。

一方、11月の全日本女子学生優勝大会は初戦で信州大学を4—0で降したが、次戦で同大会で優勝することになる中央大学と対戦。力の差は埋めがたく、0—2で敗れた。

関西2冠となった2021年。那須監督は全公式戦が中止になった昨年を思い起こし、「試合ができるということがこんなに有難いことなのかと改めて深く感じた」と振り返り、大会開催のために徹底した感染対策を取った関係者に感謝した。

先鋒の瀧本翔太

次鋒の福家瑞寿輝

主将の本田和㊧

中堅の堀由美恵㊧

五将の主将・伊﨑理倫

体操競技

体操競技部男女インカレ1部復帰

8月31日に開幕した第75回全日本学生体操競技選手権大会（インカレ）で体操競技部が躍動した。2部団体総合で女子は優勝、男子も準優勝となり、ともに1部への復帰を果たした。

全日本学生体操競技選手権大会 全日本体操団体選手権大会

女子 体操競技部女子にとって実りの多いシーズンとなった。全日本インカレで優勝し、10月の関西学生新人選手権では個人総合と種目別の全種目で優勝を独占。さらに、目標に掲げていた全日本団体選手権の出場も6年ぶりに達成した。

インカレは2部団体総合で優勝したほか、個人総合は1位の北田絢女（体育1年）、2位の北川莉奈（体育1年）、3位の吉田菜々花（体育2年）をはじめ、4位の春内琴美（体育2年）、5位の柳川友紀（体育3年）とベスト5を独占。種目別でも北川が跳馬、平均台、段違い平行棒、北田がゆかを制するなど圧倒。田原宏晃監督は「全員がほぼミスなく、いい試合をしてくれた」と振り返る。全日本クラスの北田、北川、吉田だけでなく、団体の4種目中2種目に一番手に起用された大野帆加（体育1年）がミスなく演技して流れを作るなど全員の勝利を強調した。

続く関西学生新人選手権では個人総合で北田が優勝、大野が2位となり、本学は現3年の柳川、2年の吉田に続き3年連続でトップの座に。種目別も北田が跳馬、段違い平行棒、ゆか、大野が平均台と全種目制覇。インカレの勢いをうまくつなげた大会となった。

12月の全日本団体選手権は、今年開催された全日本インカレ、全日本ジュニア、全日本シニアの結果より16チームのみ出場できる。16位で出場権を得た体大は、北川が怪我で欠場するなど万全ではなかったが、全日本インカレ1部5位の順天堂大学を上回り1つ順位を上げて15位で日程を終えた。

田原監督は全日本の大舞台を経験した意義を強調する。会場は国立代々木第一体育館、有料で観客も多数入場、インカレでは経験できないポディウム（演技台）での演技。「選手は大舞台に出て、周りのチームの雰囲気やトップチームの一演技にかける姿勢など学ぶことができた。また、大会に向け練習も高い意識で臨めた」と話す。

来季に向けて、「再び全日本団体の舞台を踏めるよう、インカレでは7～8位には入らないと」。シーズン初めの4月にある全日本個人総合選手権は北田、北川が出場権を獲得しており、全日本インカレで獲得したユニバー枠の1枠は、学内選考会でしのぎを削る。

北田絢女

北川莉奈

吉田菜々花

インカレ2部で優勝した女子団体

全日本学生体操競技選手権大会 関西学生体操新人選手権大会

男子 体操競技部男子は2018年の2部団体総合優勝によって1部に昇格したが、翌19年、惜しくも2部降格。昨年は2部で再度団体総合優勝を果たすも、コロナ禍の影響で1部2部の入替は実施されなかった。

2021年度のチームの目標は、通常の入替がある場合は達成不可能な「2部団体総合連覇」。さらに2部からの全日本体操団体選手権への出場権獲得。大学では6～7校しか出場が望めない「団体」に2部から出場した大学はまだない。高い志を掲げた。

しかし、全日本インカレ直前の8月中旬、アクシデントに見舞われた。体調不良者が出て部の活動がいったん停止。試技会も予定通り開催できない上、エースとして期待された田部壮一郎（体育1年）の戦線離脱も余儀なくされた。

8月31日、調整に不安を抱えたまま全日本インカレが開幕したが、チームは踏ん張った。団体総合は近江奎太（体育2年）がチームを引っ張り、4年の田中久嗣（体育）らも踏ん張って2部2位に留まった。総合得点378・423は1部出場校10校を合わせた中でも8位。苦しい状況下で選手、コーチ、スタッフが粘り、全日本団体の出場こそ逃したが、1部昇格を果たした。

近江は個人総合と種目別あん馬で2部2連覇を果たした。

また、平行棒で3位に入った田中は2021年の初めに右ひざのじん帯を断裂。手術するとインカレは絶望となるため出場を目指して手術せずに保存療法を選択。大会直前にメンバーに滑り込んで1部昇格に貢献した。

苦境に立たされた8月、体調不良の藤原敏行監督が現場に出れない状況となり、指導やチームのマネジメントを一手に担ったのは、2019年から本学で指導する五輪銅メダリストの佐藤寿治コーチ。藤原監督は「インカレでのチームの踏ん張りは佐藤コーチの尽力の成果だ」と話す。

また、10月の関西学生新人選手権では、本学が個人総合は上位11人、種目別も全6種目の上位6人をすべて占めるなど関西での圧倒的な層の厚さを見せつけた。田部は個人総合を含む5冠を達成した。

来季に向けて、藤原監督はコーチ、選手とも「1部上位進出を狙おう」と話し合っているという。1965年の創部以来、把握している中では過去最高の団体総合順位は6位。その歴史を塗り替えて、来季こそ全日本団体の舞台で戦うことが目標だという。

近江奎太

田中久嗣

インカレ1部復帰を決めた男子

ラグビー

関西大学ラグビーリーグ

無念の入替戦

ラグビー部は関西大学Bリーグで2連覇。Aリーグ8位の関西学院大学との入替戦に進出した。しかし、17―48で敗れ、Aリーグ復帰は果たせなかった。

2019年、入替戦に敗れてBリーグに陥落したラグビー部。2020年はBリーグで地力の差を見せつけて優勝したが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、入替戦の実施が見送られた。それだけに2021年はA復帰にかける思いが強かった。従来のチームは愛称の「ヘラクレス」のとおり、FW戦が主体だったが、バックスの展開力を強化してグラウンドを広く使うとともに、FWもスクラムを中心に更なるレベルアップを図って、9月のリーグ戦の開幕を迎えた。

直前に体調不良者が出て危ぶまれたが、初戦の甲南大学戦は無失点に抑えて内容の良い勝利。神戸大学に快勝した後、留学生が3人いて地力のある花園大学に大差で勝ち、勢いをつけた。大阪国際大学、大阪産業大学にも快勝。Bリーグは得失点差379と圧倒して5戦全勝で1位に。中谷誠監督は「試合を重ねる中でチームの状態も上がってきた」と振り返る。

2次上位トーナメントで追手門学院大学に61―22、龍谷大学に48―15で勝ち、入替戦での関西学院大学との対戦が決まった。選手同士がぶつかり合う接点でのAリーグチームの強度に耐えるため、社会人のJR西日本レイラーズ（神戸市）と合同練習をするなど対策を重ねて入替戦に臨んだ。

しかし、中谷監督は「接点では負けていなかったが、スピードやうまさ、細かな点で相手が上だった」と振り返る。前半はNo.8のマウ・シオネシメ（体育1年）が16分にトライしたが5―19で折り返し、後半は途中出場の清水頼仁（体育3年）が37分とロスタイムに2トライを挙げたが、17―48と大差がついた。

中谷監督は「2年越しの入替戦。選手は昨年の4年生の思いも意識し、気持ちが入り過ぎたのかも知れない」と話す。3年越しの悲願に向けて、来季は更なる強化に挑む。

タックルを引きずり前進

来季見据え更なる強化を

ラインアウトでマイボールを獲得

ゴール前のラックからトライ

密集からの展開攻撃の機会をうかがう

硬式野球部女子

悲願達成

全国大学女子硬式野球選手権大会

硬式野球部女子が創部13年目で悲願を達成した。9月に和歌山県田辺市などで開催された第11回全国大学女子硬式野球選手権大会（インカレ）の決勝で平成国際大学を4―3で降し、初のインカレ優勝を成し遂げた。

2020年秋の大会では決勝で尚美学園大学に0―5で敗戦。女子は春から夏にかけても全国大学選手権が高知県であり、決勝で環太平洋大学に2―4で敗れ、あと一歩の連続。昨年の主力がほぼ残る2021年は悲願を果たすチャンスの年だった。

インカレでは、予選リーグを2勝1敗の1位で通過。準決勝では立野歩佳（体育4年）が至学館大学を完封し、3―0で決勝に進出した。

決勝は一回表、中堅・白石美優（体育1年）が先制の左中間二塁打を放つ。白石はプロの京都フローラで3年プレーした後、教員や指導者を目指して本学に入学した。

二回に1―2と逆転されたが、三回、大野七海（体育4年）の適時三塁打、白石の犠飛、中村華月（体育3年）の適時二塁打で4―2と再逆転した。

先発の左川楓（体育2年）にとっては決勝で敗れた春のリベンジをかけたマウンド。得意のスライダーを軸に粘ったが、六回にピンチを迎えた。2死からタイムリーを許して1点差に迫られ、なお一、三塁で中堅に大飛球を打たれた。あわや逆転の場面で白石がスライディングキャッチ。左川は七回も無安打に抑え、歓喜の輪に包まれた。

硬式野球部女子は創部後約2年間は監督不在だったが、以後、横井光治監督が指導し少しずつ力をつけた。横井監督は胴上げで宙に舞い、「本当に長かった。この日を待っていた」と感無量だった。

また、白石は「3年間プロを経験して大学に来た。1年生でも4年生とは同級生で、優勝したいという気持ちは誰にも負けない」、主将の戸室知奈美（体育4年）は「みんなで野球を楽しむこと、気負わずプレーすることを心がけてきた」と話した。

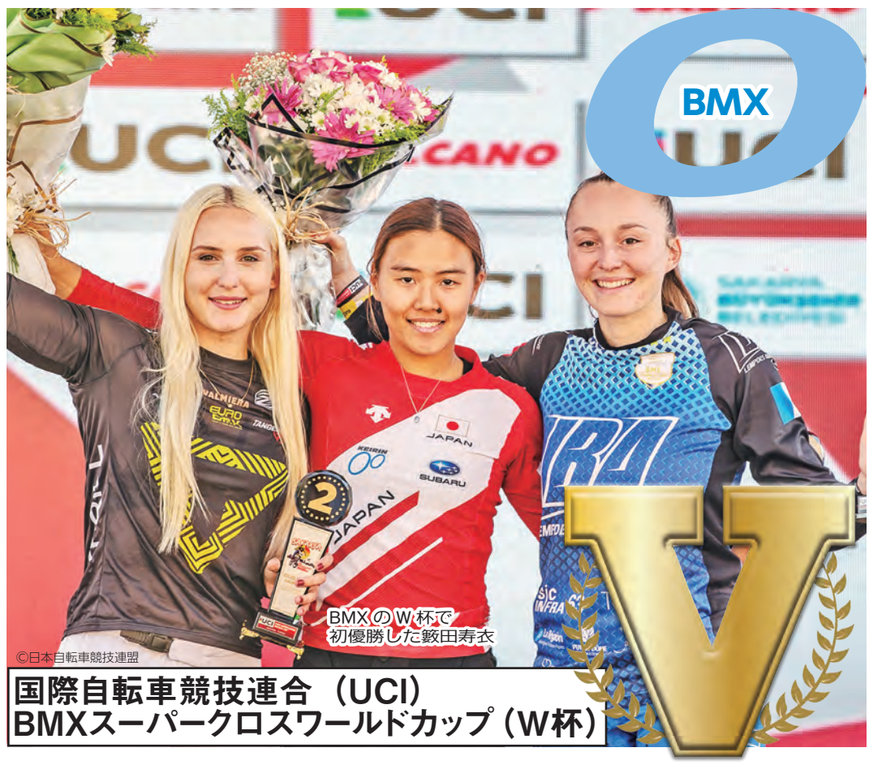
女子野球は2021年、阪神タイガースWomenが創設されて本学の卒業生4名も加わり、史上初めて高校の決勝が阪神甲子園球場で開催されるなど注目度が増している。

そんな追い風ムードの中、読売巨人軍が2023年に向けて女子チームを創設することを発表し、4番の山下陽夏（教育4年）が1期生として入団することが決まった。山下は「私たちが、よりいい風を吹かせるように頑張りたい」と話している。

先制打を放った白石美優

4番の山下陽夏。巨人軍女子チームへの入団が決まった

BMX



BMXのW杯で初優勝した籔田寿衣

©日本自転車競技連盟

国際自転車競技連合（UCI）
BMXスーパークロスワールドカップ（W杯）

自転車のBMXで、大阪体育大学DASHアスリートの男女が躍動した。籔田寿衣（体育2年）が、国際自転車競技連合（UCI）BMXスーパークロスワールドカップ（W杯）第7戦（10月、トルコ）の23歳以下で初優勝。増田優一（体育2年）はジャパンカップ2021（11月、堺市）で初代王者となった。

W杯は第7、8戦が10月30～31日にあり、籔田は第7戦で優勝し、第8戦では4位。第5戦も2位で、W杯全8戦のシリーズ総合成績でも日本選手最高の3位になり、表彰台に立った。

大阪府松原市出身。5歳の時、同じ保育園の友達の兄の試合を見て憧れ、BMXを始めた。大阪偕星学園高校では個人としてBMXに取り組み、大阪体育大学にはDASHのサポートに魅力を感じて入学を決めたという。

W杯は2021年からU23が新設されて初参戦した。

籔田は「小さいころからW杯優勝を目標にやってきた。今年は決勝進出と表彰台が目標だったので、それ以上の優勝を獲得できてすごく良かった」と喜ぶ。「2022年の目標は世界選手権U23での優勝。東京五輪は年齢的に難しかったが、3年後のパリ五輪とロサンゼルス五輪（2028年）は最大目標です」と語った。

一方、増田はジャパンカップ2021で初代王者に輝いた。国内トップ選手を集めてエンターテインメント性を高めて創設された大会。「地元開催でプレッシャーもあったが、なんとか優勝できた」と語る。補助輪が取れて自転車に夢中になっていた5歳の時にBMXを始め、大阪偕星学園高校で、本学OBの担任からDASHなどの推薦制度を知らされて入学した。「国際大会でポイントを取ってランキングを上げ、パリ五輪とロス五輪を目指す」と夢を語った。

BMXジャパンカップ初代王者になった増田優一

ジャパンカップ2021

インカレ演技の部などで優勝したなぎなた部。中央が天川彰子監督

つながった連覇の夢

OUHS

大阪体育大学学友会　なぎなた部

なぎなた部

「インカレ3冠」。高い志を掲げて8月の第60回全日本学生選手権大会に挑んだなぎなた部。目標にあと一歩に迫る快挙を演じた。

全日本学生なぎなた選手権大会

演技の部で阿部真優（体育2年）・井口晴奈（体育4年）ペアが、なぎなたの理合を十分に表現した演技を披露。決勝で鹿屋体育大学ペアを4―1で圧倒し、本学勢として4連覇を達成した。

試合形式の個人戦では、志藤すず穂（体育4年）が関西チャンピオンとして臨み、決勝で延長戦を制して優勝。2012年度の大会を制した姉の綾香（体育学部卒業）との姉妹チャンピオンとなった。

団体戦は終始、攻めのなぎなたを貫き、決勝では鹿屋体育大学に僅差で敗れたが、準優勝に輝いた。

なぎなた部の強さの源泉は、以前から豊富な練習量にあったが、今季はコロナ禍で練習時間が限られた。選手は集まることが難しくても、ウェブ会議でミーティングを重ね、ユーチューブの練習方法の動画などを参考に個々に技を磨いた。天川彰子監督は「インカレでの活躍は、学生が練習内容をよく工夫した成果だ」と話す。

2020年もコロナのために公式戦が中止されたが、演技の部だけはオンラインで西日本学生選手権が開催され、阿部・井口ペアは本学の4年生ペアに次ぐ準優勝を果たした。元々、2人とも高校時代から県代表になるなど実績豊富だったが、この大会で課題を見つけてインカレにつなげ、連覇のたすきをつないだ。

個人戦の志藤の長所は、脚力があり、遠間から攻めることができる点だ。チーム内で自ら立候補して個人戦に出場した。

5人で争われる団体戦は、演技と個人の3人に赤堀桃子（体育4年）、山下楓香（同4年）が加わった。初戦では関西大学を相手に接戦となったが2―1で競り勝ち、準決勝は武庫川女子大学に3―0で快勝。手の内をよく知る関西勢との対戦が多かったことも有利に働いた。

少数精鋭の6人のメンバーのうち、来季は4年生4人が抜ける。天川監督は「メンバーが多く抜けるが、演技の5連覇、個人戦の2連覇がかかる年。連覇をつなぎたい」と意欲を見せている。

大学日本一を目指し、厳しい稽古が続く